



末森城跡

県指定史跡

鳥瞰イメージ



末森城の歴史

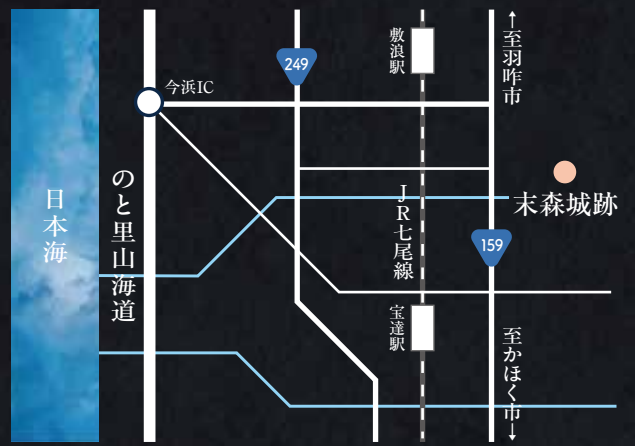


前田利家(開禅寺蔵)



佐々成政(法園寺蔵、尼崎市立歴史博物館 画像提供)

所在地



アクセス

- ・JR七尾線「敷浪駅」から末森城跡駐車場まで徒歩約30分
- ・のと里山海道「今浜IC」から末森城跡駐車場まで車で約10分
- ・末森城跡駐車場から本丸まで徒歩約20分

Google map

スマートフォンのカメラで右のQRコードを読み込んでください



三国境の要衝「末森城」

末森城跡は、宝達志水町のほぼ中央にある末森山(標高138.8m)に所在する山城跡で、能登と加賀・越中を結ぶ交通の要衝に位置しています。

確かな築城年代は分かりませんが、発掘調査では土師器や陶磁器、砥石、基石、鉄砲玉、鉄釘、銅銭などが出土しており、おおむね15世紀後半から16世紀にかけて活動していた痕跡が確認できます。

文献では、天正5年(1577)8月の上杉謙信書状に「末守」と確認できるのが最初です。「末森」と記されるのは江戸時代。上杉氏の支配の後、織田信長に仕

が衝突した「末森合戦」の舞台として有名です。

天正10年に本能寺の変で織田信長が死去すると、織田家の家督をめぐる争いが起こります。翌11年の賤ヶ岳の戦いで柴田勝家(豊臣)秀吉に、織田信雄(信長の次男)と徳川家康が対抗したのが天正12年3月に始まる小牧・長久手の戦いです。この戦いで、前田利家は羽柴方に、佐々成政は織田・徳川方について戦いました。

同年9月、佐々成政は、前田利家の領国である加賀・能登の分断を図るため、末森城を急襲します。成政は、越中から宝達山系を越えて末森城にほど近い

加賀百万石の礎を築く きっかけとなった戦い 「末森合戦」

末森城跡は、天正12年(1584)9月に前田利家と佐々成政

えた土肥親真の下で、羽咋郡の行政の中心として、城下町も整備されました。親真の死後、前田氏の城となり、その後、同14年に「末守町」が解体され、「敷浪」に移転される頃までは、末森城も機能していたと考えられます。

つまり、末森城は加能越国境の要衝に位置する軍事拠点であり、戦国末期において羽咋郡城支配の中心地としての機能も担っていたのです。

坪井山(坪山)に本陣を張って攻撃しました。しかし、城将奥村家福(永福)らの徹底抗戦と、利家の素早い救援により、成政は撤退することになります。

この戦いの功績で、のちに利家は秀吉政権内の地位を向上させ、前田氏に加賀・能登・越中三カ国を領有する道が開かれました。このことから、「末森合戦」が、加賀百万石の礎を築くきっかけとなった合戦と評価されるのです。



奥村永福(永福寺蔵)

発行

宝達志水町教育委員会生涯学習課文化財係
〒929-1343 石川県羽咋郡宝達志水町小川ハ249番地1
宝達志水町埋蔵文化財センター
TEL. 0767-28-5180 / FAX. 0767-28-2483

末森城跡関係年表

年号	西暦	主な出来事
天正5年	1577	9月15日、上杉謙信により七尾城が落城する 9月17日、上杉謙信、「末守」の地を手に入れ、家臣の村上(山浦)国清、斎藤朝信を配置する 9月23日、上杉謙信、柴田勝家ら織田軍を加賀手取川で破る(手取川の戦い)
天正6年	1578	3月、上杉謙信病死
天正7年	1579	7月、上杉景勝、末森城の土肥親真に、加賀一向一揆と協力して同城を堅守するよう命じる
天正8年	1580	閏3月、柴田勝家ら織田勢が加賀に乱入する。その後、能登に進軍し、土肥親真を降す 8月、織田信長、土肥親真に羽咋郡の知行を命ずる 10月、土肥親真、御礼言上のため安土城に上る
天正10年	1582	6月2日、織田信長、京都本能寺で明智光秀に討たれる(本能寺の変)
天正11年	1583	4月21日、羽柴秀吉、柴田勝家を近江賤ヶ岳で破る(賤ヶ岳の戦い) 土肥親真、前田利家の与力として参陣し、討死する 5月11日、前田利家、奥村家福(のちの永福)および千秋範昌を末森城へ派遣する
天正12年	1584	3月6日、織田信雄、親羽柴派の家臣を殺害する。その後、徳川家康とともに挙兵する(小牧・長久手の戦い) 9月10日、佐々成政、坪井山(坪山)に陣を構え、末森城を攻撃する。前田利家、末森城の救援に赴き、佐々成政を攻撃する(末森城の戦い)
天正13年	1585	8月、豊臣秀吉、佐々成政を降伏させる
天正14年	1586	7月、前田利家、「末守町」を「敷浪村」に移転させる(末森城の廃城)

末森城跡 縄張り図

末森山を中心に四方八方に派生する尾根部に城郭遺構が展開しています。城郭内には、敵に簡単に攻められない工夫が施されています。



1 主郭に相当します。北に長さ50mの後曲輪と南に二ノマルを改修した馬出しを、北と西の斜面には堅堀を配置し守りを固めています。ホンマルからは、日本海が眺望できます。



2 南側に逆L字型の堀が設けられています。これは、城道を大きく曲げて、曲輪の出入り口を制御するために設けられた防御設備の「馬出し」と考えられています。



3 南側には3段の曲輪とその東に土塁を持つクランク状に屈曲した堀があります。屈曲した堀は、南側が西側に張り出しており、横矢(敵を側面から鉄砲や弓矢で攻撃すること)をかける工夫が施されています。



4 発掘調査で掘立柱建物や土坑、溝跡が確認されています。15世紀後半から16世紀中頃の土師器や陶磁器、砥石、基石、鉄砲玉、鉄釘、銅銭など生活遺物が出土していることから、山上で居住していたと考えられています。



5 虎口(城の出入り口)と推定されています。城道を屈曲させ横矢の形態をとることが確認されています。発掘調査では、越前焼、土師質土器、鉄釘、銅銭が発見されています。



6 軍記物などに、「籠城戸(ささらきど)」と記されるものと関連が考えられますが、はっきりしていません。幅3m、延長21mの土塁を持つ曲輪があり、この場所が本丸に向かう城道の出入り口の一つであったとみられています。